

トンレサープ湖

—人と自然の息づかいを感じる場所—

岡 田 龍 樹*

どこからか、小さな鳴き声のような、か細い歌のような声が聞こえた気がした。はじめは空耳かと思っていたが、その音はだんだんと大きくなってきた。近づいてくるその音の方角を見ると、かわいらしい女の子2人が小さなボートを漕ぎながら、ゆらゆら近づいてくる。青いペンキで塗ったのか、プラスチックなのか分からないが、ドラム缶を半分にしたような小さなボートに乗っている。前に座っているポニーテールの子が、パドルがわりの木を巧みに使って、ボートはくるくると近づいてくる。右に左に、ボートはパドルの力をダイレクトに受けて、大きく揺れる。ボートのゆれに合わせて、彼女たちの声も揺れている。はじめは空耳と思って聞き流していた音は、どうやら彼女たちの歌う声だったようだ。とてもかわいらしい2人が、けなげにボートを漕ぎながら、歌っている。ただその声は、はつらつとした歌声ではない。無邪気で楽し気な歌でもない。なぜかものの悲しさを、寂しさを感じるような声だった。メロディーも哀愁が漂う、もの悲しいメロディーだった。

彼女たちは、「Give me one dollar」と何回も繰り返していた。はずかしそうなわけでも

なく、誰かにいやいややらされているわけでもなさそうだ。けれど、無邪気にいたずらをして無邪気に楽しんでいるわけでもない。ただただ「1ドルを頂戴」と歌っているのだ。彼女たちの仕事なのだろうか。でも強制された感じではない。ほかに遊ぶことがないのか、それとも、ひとつのイベントとして捉えているからなのか、めんどくさそうなそぶりは見られない。けれど決して無邪気で楽しそうな様子でもない。

彼女たちのボートが、僕のボートの横に到着した。彼女たちの顔は笑顔だった。満面の笑みではなく、はにかむような笑顔だった。そしてじっと僕たちを見ながら、「Give me one dollar」と歌っている。僕はもししたらいいか分からず、その歌と、彼女たちの視線を1分ほどぼーっと聞いていた。

彼女たちは、僕たちからどうやらお金がもらえなさそうだと感じると、またくるくるとどこかへ船を漕いでいった。Give me one dollarの歌はもう歌っていなかったが、僕の頭の中では、メロディーが、彼女たちの姿が何度もリフレインしていた（写真1）。

僕を乗せて船はゆっくりと進んでいく。定員4人ほどの小さな船で、湖に浮かびなが

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ら生活する水上村を眺める。船首に座った漕ぎ手は、ゆっくりゆっくりパドルで漕いでいる。カメラを向けると、漕ぎ手の彼は振り返り、少しはにかんでお辞儀をしてくれた。1本のパドルで大人4人乗りの船をゆっくりと漕いでいく。2月は乾期だ。ちょうどお昼ご飯時で、よく晴れている。気温は30度前後、波はない。僕たちを乗せた船はゆっくりと進んでいく。

先ほどまで女の子たちに気を取られて、周りを見れていなかった。改めて見ると、湖の上にはいろんなものが浮かんでいる。右手に金網のかごが見える。4畳ぐらいの筏の上に設置されていて、天井部分は布で覆われ、中は日陰になっている。よく見ると、何やら動物を飼っているようだ。見た目はあひるのようだが、体は黒くて頭部が赤い鳥が飼われている。水上村の人々は、卵をとったり肉を食べたりするのだろうか。

けばけばしい黄色の建物が目についた。建物の大きさは10畳ほどだろうか。連結したドラム缶によって水上に浮かんでいる。建物

の両端で、ハイビスカスのような花が咲き誇っている。入口の左右には仏像が1体ずつあり、赤や金、黄色の布で飾られている。建物の中には、陰になって見づらいが、仏像らしきものが何体もある。どうやら寺院のようだ。寺院の正面には看板がかかっていて、クメール語とベトナム語が書かれている。ベトナム語は「Chùa van su tan Minh」, 「神懇願する 僧侶 終わり 水上居民」と書いてあった。どうやらこの水上村には、クメールの人だけでなくベトナムの人々も住んでいるようだ(写真2)。

女の子がくるくると近づいてきた。今度は大きな鉄製のたらいにひとりで乗っている。鮮やかな蛍光黄色のパーカーを着ている。彼女は少し陰い顔をしている。歌うわけでもなく、じっと僕を見ている。そして多分クメール語で、「お金頂戴」と言ったのだろう。2回目なので、僕は状況を理解していた。けれど、お金を渡すか決めかねていて、まごついていて、そうしているうちに、女の子はブイっと後ろを向いて、僕の乗っているボート



写真1 歌いながら近づく2人の少女



写真2 クメール語とベトナム語が書いている建物

からさっさと離れていった。

さっきの2人組の女の子たちもそうだったが、女の子たちはわりにきれいな洋服を着ている。彼女たちはどこで服を買って、どのように洗濯しているのだろうか。服は、お金を使って買っているのだろう。お金はどのように得るのだろうか。もしも僕からお金を得たとして、どのような用途に使うのだろうか。

そろそろ船も折り返し地点にやってきた。水上集落の端にきたようで、家もまばらになってきた。4人ほどの欧米系の人たちを乗せた船がゆっくり進んでいる。僕が行きに通った通りを進んでいるのだろう。彼女たちは盛んに写真を撮っていた。彼ら、彼女たちはここで何を感じているのだろう。

水に向かって何やらもみ殻のようなものを撒いている人がいる。もみ殻のようなものは、円筒形の木製の箱に入っている。どうやらもみ殻のようなものは、魚の餌であるらしい。船主がもみ殻撒きの男性と知り合いらしい。2人で少し話をした後、男性は僕たちにてのひら一杯分の餌をくれた。餌は干しエビだった。天日干しされていて、おいしそうなおいがする（写真3）。

もらった餌をどこに撒けばいいかわからず、見たり匂いを嗅いだりしていた。船主がこちらを振り向き、水面を指さしている。おそらく何かいる場所らしい。どうやらここに餌を撒け、ということなのだろう。罟が設置されているのだろうか。紐で束ねてある枝が水面から少し見えた。枝は魚にとって隠れ蓑となるので、魚を集める役割がある。ここでは魚を小さいうちに生け捕りし、大きく育てる



写真3 餌を撒く男性

こともあるらしい。育った魚は自分たちで食べたり、売ったりするのだろうか。水上集落に住む人はどんなものを食べているのだろうか。さかな、トリはいた。野菜や主食は何を食べているのだろうか。

中華の雰囲気漂う建物がある。赤色が多い、漢字の書かれている団扇のようなものが入り口に張られていた。右側の柱には、「? (陰で読めない) 年大吉好運来」。左の柱には「平安富貴福星照」と書かれていた。中国系の人が住んでいるのだろうか。玄関からちらっと見える建物の中には、立派な額縁があった。そして祭壇のようなものもあった。さきほどはベトナム語の書いてある寺院を見た。小さい水上村に、少なくともクメール、ベトナム、中国の文化がある。この水上にはどのような人々が住んでいるのだろう。

さまざまなルーツ、背景をもった人々が、同じ場所で暮らしている。

ボートやドラム缶、の上にはられた床の上に、さまざまな建物や施設が浮かんでいる。家にもいろいろな類がある。小さなプラスチック製のボートの上に屋根を設置した家。少し大きめの鉄製のボートに屋根を設置した家。竹や木などで組んだ筏の上に、壁や屋根を設置した家。大きさもさまざまである。ボート1隻サイズのものもあれば、20畳ほどのサイズの家もある。壁や屋根の材質もそ

れぞれだ。トタンだったり、木だったり、鉄だったり。屋根にソーラーパネルを設置している家、テレビのアンテナを立てている家、崩れた屋根がそのままの家。もしかすると、家の規模や材質は所得に関係があるのかもしれない。水上といえど、人々の生活には差がある。民族や宗教だけでなく、経済的にもさまざまな人が、同じ場所で暮らしている。

ボートは出発点に帰ってきた。

ここは水の上の世界。人と環境が混然とした世界、カンボジア・トンレサープ湖である。